



滋賀県人の「県民性」とは……

◇海のない県の県民性は概して暗いようですが、滋賀県人は例外で、それは海のように大きい湖があるためとされています。中国人が琵琶湖を見て「日本にも大きな河があるね」と言ったという笑い話がありますが、日本人からすれば琵琶湖は海のようなです。

◇「琵琶湖の鮎は外に出てはじめて大きくなる」と言われます。県外に出ると商人として成功するのに、県内にとどまると小鮎のように小さくまとまって生涯を終える、という意味が含まれます。琵琶湖の鮎も他に放流せずそのままにしたのでは、せいぜい十センチまでしか成長しません。

◇滋賀県人は因習にこだわらない、という統計があります。NHKが行った県民意識調査で、「昔からあるしきたりは尊重すべきだ」と考える人の割合が、全国でいちばん低かったそうです。

◇他方、滋賀県人は宗教心、信仰心が厚いといわれます。同じNHKの調査でも、「神仏のような、何か心のよりどころが欲しい」と考える人が、全国で二番目に多かったのです。

◇近江商人が先見性に富んでいたことについて、情報の入手と打つ手の速さは他の追従を許さなかった、という最近の研究があります。

県南東部は古くから東海道、中仙道、北国街道などの街道が走り、関東と関西、さらに北陸を結ぶ交通の要衝であったから、「生」の情報がもたらされました。平生は初心を忘れずに儉約に努めました。日本各地の地域による価格差の情報などに接すると、ここぞと積極的な投資を行い、今日の大を成したのです。



琵琶湖へ漕ぎ出る

奥居 重彦 (彦根出身)

敗戦の年から三年経った昭和二三年、わたしは彦根東高校の二年生だった。初夏の頃、校内のボートレース(六人漕ぎ)が彦根の港湾で行われることになり、各学年毎に出場選手を募っていた。私は面白半分に出場を申し出てメンバー入りを果たした。

私は少年の頃から時々兄に連れてこられて、この港湾の貸しボートに乗せられ、兄の漕ぐオールさばきに魅せられ、水面を走る楽しさを味わっていた。そのたびに、はるかに眺める彦根城は、いつも威厳とともになにか歴史の教訓を物語っているように思えてならなかった。

わがクルーのメンバーはやんちゃな面々が顔を揃えていて、ある日練習のあとで、一つ

思いきって、琵琶湖に浮かぶ多景島まで漕いで行こう、と決めたのだった。その日は午後
の授業をさぼって教室を抜け出し、ペンのかわりにオールを握りしめて、いよいよ琵琶湖
舟航の第一歩を踏み出したのであった。

幸いに天気にも恵まれ、風も穏やかな日となり順調な出航をした。オールさばきの呼
吸もよく合って、ボートは軽やかに湖上を滑って行った。遠くかすむ彦根城が次第に小さ
くなり、湖上を渡る風も汗ばんだ肌を心地よく撫でていく。浜千鳥の群がボートの上を乱
舞し始めると、多景島の島影が次第に大きく迫るようになってきて、やがてボートは無事
に島に接岸できた。オールを放したとたん、全員は思わず「やったぞ」と歓声をあげ、自
他ともに祝福しあったものである。

このように湖上を遠く漕ぎ出た練習の成果は、レースの本番で一回戦二回戦と勝ち進み、
見事に優勝の栄冠を勝ち取って、ここに実を結んだのであった。この感激は汗を流した思
い出と共に、わが青春に悔いなしの思いを、今も胸によみがえらせてくれるのである。

(註) レース用ボートは漕ぎ手が六人で、もう一人後尾にいて舵を取りながら、「ローロ
ー」と掛け声をはりあげるコックスがいる。

老年暴走族だより



〔Ⅳ 再挑戦〕

平田 文一 (近江八幡出身)

本年四月、十数回目の免許更新です。七十歳以上は高齢者講習が必要でもう予約しまし
たが、老年暴走族としては問題なく受講証明が出るものと思っっています。ここ三回ばか
りはゴールドであったので、半日もかからずに更新できたのです。高齢者は三年ごとに
しなければならず、あと一年で後期高齢者になるので、あの嫌なシルバーマークを添付し
なければなりません。本人はまだまだ老年暴走族を続けるつもりです。

昨春、西日本のドライブコースがこれまで倉敷までだったのを、尾道、四国まで延長で
きました。そうなるのと東日本も仙台までだったのを延ばしたいと思い、高速通行料割引が
六月には中止されそうなので、五月までの土日割引を活用して、長年の願望であった平泉
の中尊寺を目指し、気仙沼、福島いわきを巡る三泊四日の長距離ドライブに再挑戦します。
年令を考えると長距離ドライブはそう長くはつづけられないと思い、行けるときに言っ
ておこうと考えているのです。これからは一年ごとに、体調も気力も変化してくること
でしょう。平泉へのドライブが終わった頃には、走行距離が十万キロに届くのではと思いま
すし、八台目の車に向かって進むか、それともぼつぼつ車を卒業すべきか、心は多少は揺れ
るのですが、体力と気力が続く限り続けたいというのが、偽らざる気持です。
今、東北方面へのドライブ計画の最中で、日程、行程、時間などの案を創るのが楽しみ
で、半分旅行した気分になります。七十歳にして千四百キロの行程が無理だったか、楽
しかったかは次回にご報告しましょう。

(次号へ続きます)



近江の名句 ④

苗代の青や近江は真つ平 吉川英治

「サラ川が教えてくれる世の流れ」【詠人かわのやなぎ】これは、昨年末第一生命のおばちゃんに頼まれ頭をひねって応募し、まさかと思っていたが地区で佳作(全国版は落選)に選ばれたサラリーマン川柳の句です。アイロニーのつもりでしたが、「世の流れ」を考えると感慨深いものがあり、四〇年前にも訪れた掛川、駿府、二俣など静岡の城址の今昔を写真で辿ってみました。

掛川城は、昭和四二年当時(下写真上)は太鼓櫓だけであったが、平成一三年には、天守閣も復元(平成五年)されていた(下写真下)。以前は国鉄二俣線として新所原まで結んでいたが、今は天竜浜名湖鉄道と変っている。この天守閣は、図面に基づき、木製で昔を忠実に再現していて、愛媛県大洲城、宮城県白石城など数少ない復興天守の一つである。



駿府(静岡)城も、昭和四三年当時は、整備も十分でなく荒城を思わせたが、平成一八年には、本丸翼櫓(平成元年)東御門(平成八年)が、復元・復興され駿府公園として整備されてきている。平成一八年六月には、城址の近く葵区の「はーといん魚勝」で、東部・遠州支部合同会合が行われている。

徳川と武田の熾烈な戦場であった二俣城は、先の二城と異り昭和四三年(下写真上)、平成一〇年(下写真中)と殆ど変わっていない。昨年には、国民文化祭しずおか2009城跡フェスティバルの行事として、地元の天竜杉を使い模擬天守が造られ(下写真下)イベントが催された(今は壊されてない)。



元龜三年(1576)武田信玄に攻められた徳川方は、天竜川の水を井戸櫓から汲上げ必死の抵抗を試みたが、籠城二ヶ月、櫓を壊され降伏した。その後、徳川方に帰すが、織田信長の

命により、長男信康が自刃したのもこの城であった。
 現在信康廟のある清瀧寺に、井戸櫓が復元(下写真)されている。
 近江と外れてしまった感があるが「世の流れ」を辿ることで
 明日の糧になればと考える。
 (次号へつづく)



近江恋々(4) 久田二郎(永源寺出身)



昭和の初め頃、生まれ故郷の蒲生郡市原村(現在の東近江市永源寺)

は、まことに悠々閑々とした農村地帯だった。正月は獅子舞の一座が巡って来て、娯楽と
 いったもののない村の人らを喜ばせた。或る雪の朝、少年の私は戸外のトイレに行くのに
 戸を開けると、軒下に五・六人の兵隊が外套を被って寝ているのに驚いた。大津の歩兵連
 隊の冬季演習だったのだろう。

夏の夜、三尺程の竹竿の先に糸と針を付けミミズを餌に、道端の小溝の石の間に差し入
 れてドジョウや鰻を釣った。暑い夜に農家の戸を開けるとブーンと蚊の鳴く音が聞こえた。
 同じ屋内に牛小屋があるのだから当然のことだ。ナマ木を燻べて蚊遣りとした。夏の子供
 の楽しみは地蔵盆である。山の中腹に地藏堂があって、昼なかから餅や菓子を持ちよって
 子供会議をする。子供達だけの企画運営であった。秋の暮れ方、竹箒でトンボの大群を追
 ったりした。このトンボをヤンマと言った。黄金色の夕空にヤンマの群れが漂った。娯楽
 というものがあつたかどうか。正月の獅子舞は前に触れたが、一度、刈田に白幕のスク
 リーンを立てた映画(当時は活動写真だろう)を見たことを思い出す。映画の内容など
 記憶の片隅にもないが、風呂敷に包んだ重箱の御馳走に心弾ませたことを覚えている。ま
 た、両手のない女人が、口で茶を注いだりする、只それだけの見せ物を見た記憶がある。
 人権無視もいいところだ。

記憶が割り合いはつきりしているのは松茸採りである。私の市原村から日野町に通じる
 山合いの道がある。その東側の山であった。父親と行くのだが、住込みの男衆おとこしと女衆おんなしが
 付いてきた。早朝の山は肌寒い。生い茂った朶類をかき分けて、頭を出している松茸を見
 つけるのだ。二日も見逃すと傘状に開いてしまう。採った松茸を焚火で焼いて焼いたら縦
 に裂いて醤油で食べる。今思えば最高の食材と言えるが、私は持参の握り飯が旨かった。
 滋賀県には海が無いから海の魚は食べられない。輸送の利かない当時、マグロの刺身は話
 に聞くだけだった。私はドジョウの蒲焼きを好んだ。

子供には冬の保存食として、桶に飴を堅めたジョーセンがあつた。大工道具のノミのよ
 うな物で少しづつ割って食べた。これをカチ割りとも言った。ジョーセンはどうして作っ
 たのか、商品を仕入れたのか、分からない。各自の食膳(四角い木箱)があつて食器類が
 入っている。食事のとき各自の席に並べる。流し場が離れているからだろう。食事の後は
 お茶漬か、湯を飲むので、食器は洗わない。水道はない。代わりに屋敷の入口近くに、
 道端を流れる溝川から水を引き込んだ一間四方くらいの水場(何と言ったか)。我が家は屋
 内に井戸があるので、この水場はなかった。

(次号へつづく)

おめでとうございます

当会の山中利之さんは、元・静岡県卸酒販組合理事長を務められ、現在も(株)山中兵右衛門商店の社長ですが、平成二十一年秋の叙勲におきまして藍綬褒章を受けられました。誠にありがとうございました。

滋賀の味④ 「丁稚ようかん」



近江商人ゆかりの「蒸し羊羹」。

むかし丁稚奉公の子供が、藪入りで帰省した折り、奉公先へのお土産に買い求めたことからこの名前があります。

餡と小麦粉などを練りあげ、竹の皮に包んで蒸して作ります。

皮ごとじっくり切って、熱いお茶で味わうとなかなかの風趣です。

この素朴な郷土菓子は、高名な民俗学者・柳田國男が「これぞ近江の味」と絶賛したことも知られます。

次回あたり、「しゃくなげ会」のお土産になりそうですね。

いちどは行きたい滋賀県の文化施設 2

近江商人博物館



江戸時代から明治期にかけ、この近江・五個荘の地から、革新的な商法と不屈の精神で全国津々浦々へ行商し、やがて豪商への道を歩んだ近江商人が輩出されました。

その発生前史から隆盛期、そして未来へと続く近江商人の全貌を知ることのできる、壮大な展示品が揃っています。

また、近所には、「藤井彦四郎邸」「外村繁邸」「中江準五郎邸」「外村宇兵衛邸」等、代表的な近江商人の旧邸があり、開放されています。

☆滋賀県東近江市五個荘竜田町五八三

☆近江鉄道五個荘駅下車・徒歩二五分

JR琵琶湖線能登川駅下車・バス「生き活き館前」下車・徒歩一五分

☆名神高速道彦根ICより四〇分

☆お問い合わせ 0748-48-7101 月曜休館 料金二〇〇円

この会報を長く続けたいと思います。原稿は左記へお寄せください。会報をお望みの方は返信用封筒を同封し、左記へお申越しください。

(発行所) 〒410-0874 沼津市松長九二一―六一〇〇三 三上八郎